

文部科学省委託事業：幼児教育の推進体制構築事業

【乳幼児教育ビジョン推進事業】

乳幼児教育フォーラム

～夢に向かって未来を
切り拓く子どもに～



舞鶴市では、0歳から15歳までの切れ目ない質の高い教育の充実を目指し、保育所・幼稚園、小・中学校の先生がいっしょに学び合う研修を実施しています。特に0歳から5歳までの教育については、「乳幼児教育ビジョン」に掲げる基本理念「主体性を育む乳幼児教育」に基づき、また、保育所保育指針、幼稚園教育要領などの改訂等内容をふまえながら「子どもを主体とした保育」や「保幼小連携」などのテーマに沿って公開保育や可視化の記録(ドキュメンテーション等)の研修等にに取り組んでいるところです。それら研修の成果等の報告も含め、これからの乳幼児教育について考えます。

【日時】 平成29年12月23日(土) 13時～16時45分
 【会場】 舞鶴市商工観光センター 5階コンベンションホール (舞鶴市字浜66)
 【主催】 舞鶴市 【定員】 300名

I部【特別講演】 13時～

講師：白梅学園大学大学院 特任教授 無藤 隆氏

元お茶の水女子大学教授、元お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター教授、元白梅学園大学学長、元白梅学園大学子ども学部教授。文部科学省・中央教育審議会教育課程部会委員、内閣府子ども・子育て会議委員はじめ保育・幼児教育に関する政府審議会・調査研究会等の座長等を多く務める。



II部【乳幼児教育ビジョン推進事業 報告会】 14時30分～

指導・助言：白梅学園大学大学院 特任教授 無藤 隆氏
 神戸大学大学院 准教授 北野 幸子氏

広島国際大学、福岡教育大学を経て現職。日本保育学会理事、環太平洋乳幼児教育学会理事。平成25年より本市事業の全体指導、質向上研修講師等として関わる。

III部【交流会】 17時30分～

日程

平成29年12月23日(土) 舞鶴市商工観光センター コンベンションホール

12時30分～	受付
13時～	開会
13時10分～ 14時20分	I部【特別講演】 『未来を担う子どもたちへ これからの乳幼児教育 ～保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改定(訂)より～』 講師：白梅学園大学大学院 特任教授 無藤 隆氏
14時30分～ 16時45分	II部【乳幼児教育ビジョン推進事業 報告会】 ・質向上研修～子どもを主体とした保育、保幼小連携のテーマをもとに公開保育や可視化の記録等を通じて学んできたことを報告します。 ・保幼小接続カリキュラム策定会議 ～来年度策定予定の「まいづる015」(仮称)について経過を報告します。 指導・助言：白梅学園大学大学院 特任教授 無藤 隆氏 神戸大学大学院 准教授 北野 幸子氏
※16時45分～ 17時30分	企画【ドキュメンテーション展示】 ・各園で書いているドキュメンテーションを展示します。ぜひ、ご覧ください。
17時30分～ 19時30分	III部【交流会】 参加費：5,000円(当日お支払いください) ☆参加はどなたでもできます。講師の先生方を始め、いろいろな方と交流を深めていただきますよう、ぜひご参加ください。 ☆会場準備の間しばらくお待ちください。



乳幼児教育フォーラム

I部 特別講演「未来を担う子どもたちへ これからの乳幼児教育
～保育所保育指針、幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改定(訂)より～」
白梅学園大学大学院 特任教授 無藤 隆 先生

【幼児教育としての共通性の確保】
 ◎3歳以上の幼児教育を、同一のものにするために『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の3法を同じ内容にした。
 ◎共通性として、子どもの主体性と保幼小の接続を大切にしなければならない。
 ◎主体的な保育が、家庭保育を補い、保育格差を埋めていく。
 ◎背景として、小学校就学前の就園率が、幼稚園・保育所で同じ割合になり、研究の積み重ねから、幼児教育の質が小学校以降の成長や、非行率に大きく関わることが分かり、幼児教育が幼児期に不可欠の教育であることが認識された。
【幼児教育と小学校以上の教育と貫く柱を確保する】
 ◎資質・能力によって、幼児教育と小学校以上の学校教育で育成される子どもの力を共通に表し、土台となるように、子どもの基本となる力に注目する。
 ◎知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等、という三つの柱を基本とすることが大切であり、早期教育は意味がないと考えられる。
【幼児教育の構造】
 ◎園に来て帰るまでに出会う全てものが環境であり、出会うもの見るもの全てに意味を持つ。それが環境を通じた保育。
 ◎子どもは発達の集中力が短く、様々な所に興味がある。子ども達が物事に積極的に関わり、主体的な生活・自発的な遊びを行うためには、保育者の工夫が必要である。
 ◎保育者の援助は、能動的な関わりが大切である。
【幼児教育の資質・能力】
 ◎「知識及び技能の基礎」
 ・気付くということは、物の特徴が分かるということ。
 ◎「思考力・判断力・表現力等の基礎」

・物の特徴に気付く。遊びながら、何かを作りかえたり、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりしながら、考える力を伸ばすこと。
 ◎「学びに向かう力・人間性等」
 ・意欲とはやってみよう、作ってみよう、と心が動かされる瞬間。
 ・態度とは、自分がやりたいことを頑張り、よりよい生活を営もうとすること。



【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】
 ◎資質・能力は、ねらい及び内容に基づく活動全体を通してが育まれるものである。
 ◎「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、ねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼児期終了時の具体的な姿であり、保育を行う際に考慮するものである。
 ◎「～ようになる」という表記は、年齢なりの育ちつつある姿であることを表している。
 ◎「健康な心と体」
 ・充実感がキーワード。心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出す。
 ◎「自立心」
 ・自分で気づき、環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、自分の力で行うために考えたり(思考力)、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感(学びに向かう力)を味わいの部分がポイント。
【乳児保育の充実】
 ◎始まりは乳児。3つのねらいを大切に保育にあたること。
 ・健やかに伸び伸びと育つ⇒健康

・身近な人と気持ちが通じ合う⇒人間関係
 ・身近なものに関わり感性が育つ⇒環境
【幼児教育と小学校教育の接続】
 ◎幼児期の教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮する。
創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培う時期。
 ◎幼児期に育まれた資質・能力を踏まえ、小学校の教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換・合同研修などで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有し、円滑な接続を図る。
【小学校におけるスタート・カリキュラム】
 ◎幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、子どもが主体的に自己を発揮しながら学びに向かう事が可能となるようにすることが大切である。
 ◎幼児期に、自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合理的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成が必要である。

講演資料

今後の幼児教育、そのポイント

幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、小学校学習指導要領の改訂を受けて

無藤 隆 (白梅学園大学)

1. 幼児教育としての共通性の確保

- ▶ 3歳以上の幼児期の施設での教育を「幼児教育」と呼ぶ。
- ▶ 幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3歳以上について、共通の記載とする。
- ▶ 保育内容の5領域はすべての幼稚園・保育所・認定こども園の3歳以上について同一のものが指導される。
- ▶ 背景として、小学校就学前の就園率が幼保で同じ程度になったことと、研究や実践の積み重ねから幼児教育が幼児期に不可欠の教育であることが認識されたことなどがある。

講演資料

2. 幼児教育と小学校以上の教育を貫く柱を確保する

- ▶ 資質・能力によって、幼児教育と小学校以上の学校教育で育成される子どもの力を共通に表す。
- ▶ 知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等、という三つの柱を基本とする。
- ▶ それらは知的な力と情意的また協働的な力からなる。相互に循環的に育成されていく。

3. 幼児教育の構造

4. 幼児教育の資質・能力

- (1) 「知識及び技能の基礎」
 豊かな体験を通じて、感じたり、気付いたり、分かたり、できるようになったりする
- (2) 「思考力・判断力・表現力等の基礎」
 気付いたことや、できるようになったことなどを使い、考えたり、試したり、工夫したり、表現したりする
- (3) 「学びに向かう力・人間性等」
 心情、意欲、態度が育つ中で、よりよい生活を営もうとする

5. 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

- ▶ 資質・能力は、第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体によって育むものである。
- ▶ 次に示す「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、第2章に示すねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼児期終了時の具体的な姿であり、教師が指導を行う際に考慮するものである。

6. 10の姿 (その1、2)

ア 健康な心と体
 幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、見通しをもって行動し、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。

イ 自立心
 身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならぬことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって行動するようになる。

6. 10の姿 (その3、4)

ウ 協同性
 友達と関わる中で、互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。

エ 道徳性・規範意識の芽生え
 友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、相手の立場に立って行動するようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、自分の気持ちを調整し、友達と折り合いを付けながら、きまりをつくったり、守ったりするようになる。

6. 10の姿 (その5)

オ 社会生活との関わり
 家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、社会とのつながりなどを意識するようになる。

6. 10の姿 (その6)

カ 思考力の芽生え
 身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、多様な関わりを楽しむようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、新しい考えを生み出す喜びを味わいながら、自分の考えをよりよいものにするようになる。

6. 10の姿 (その7)

キ 自然との関わり・生命尊重
 自然との関わり・生命尊重自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。

6. 10の姿 (その8、9)

ク 数量・図形、文字等への関心・感覚
 遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

ケ 言葉による伝え合い
 先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。

講演資料

6. 10の姿 (その10)

コ 豊かな感性と表現

心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる。

13

8. 1歳及び2歳の保育 (その1)

2. 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容

- ア: 健康
健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。
- イ: 人間関係
他人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。
- ウ: 環境
周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。

15

9. 幼児教育と小学校教育の接続

5 小学校教育との接続に当たっての留意事項

- (1) 幼稚園においては、幼稚園教育が、小学校以降の生活や学習の基盤の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活を通して、創造的な思考や主体的な生活態度などの基礎を培うようにするものとする。
- (2) 幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われるよう、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を共有するなど連携を図り、幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図るよう努めるものとする。

17

10. 小学校におけるスタート・カリキュラム (その2)

また、低学年における教育全体において、例えば生活科において育成する自立し生活を豊かにしていくための資質・能力が、他教科等の学習においても生かされるようにするなど、教科等間の関連を積極的に図り、幼児期の教育及び中学年以降の教育との円滑な接続が図られるよう工夫すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと。

19

11. 幼児教育－質の時代へ (その2)

- 養成課程の質保証
 - ・再課程申請
 - ・教員の実践化、実践研究化
- 無償化、法令化、処遇改善、第三者評価
- 資格の高度化
 - ・保育士の高度資格
 - ・修士修了者の位置づけ
 - ・実践的研究者の育成
- 情報の交換と普及の仕組みの構築
- 研究拠点の構築とエビデンスの積み上げ

21

7. 乳児保育の充実

1. 乳児保育に関わるねらい及び内容

- ア: 健やかに伸び伸びと育つ
健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力の基盤を培う。
- イ: 身近な人と気持ちを通じ合う
受容的・応答的な関わりの中で、何かを伝えようとする意欲や身近な大人との信頼関係を育て、人と関わる力の基盤を培う。
- ウ: 身近なものに関わり感性が育つ
身近な環境に興味や好奇心をもって関わり、感じたことや考えたことを表現する力の基盤を培う。

14

8. 1歳及び2歳の保育 (その2)

2. 1歳以上3歳未満児の保育に関わるねらい及び内容

- エ: 言葉
経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。
- オ: 表現
感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

16

10. 小学校におけるスタート・カリキュラム (その1)

(1) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより、幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること。

18

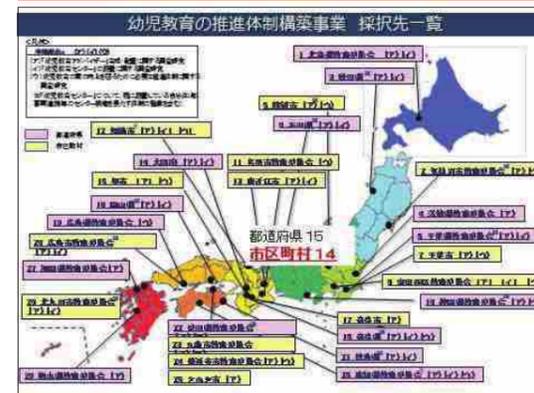
11. 幼児教育－質の時代へ (その1)

1. 幼稚園、保育所、認定こども園の幼児教育としての共通化
2. 学校教育の土台としての位置づけ
3. “教育及び保育”の考え方
4. 支援体制の確立
 - ・市町村担当者の専門化
 - ・幼児教育センター、アドバイザー
5. 研修体制の確立
 - ・キャリア別研修
 - ・義務づけ、報償との連動

20



乳幼児教育ビジョン推進事業 報告



乳幼児教育の質向上研修 子どもを主体とした保育 (概要)

(1) 公開保育、グループワーク、カンファレンス
 ◎園の公開保育と事後のグループワークにおいて実践者と参観者が保育を語り、カンファレンスを通じて学び合う。
 ◎公開保育のテーマや視点にもとづいて、参観者が子どもの姿を記録し、グループワークで活用する。

(2) ドキュメンテーション研修、グループワーク
 ◎各園で書いているドキュメンテーションを元にワークシートを活用して、保育や遊びの中の気づき、学び、保育者の関わりなどをグループで語り合う。
 ◎対象を初めてドキュメンテーションを書くフレッシュや保育のリーダーとなる保育者に分けて実施する。

乳幼児教育の質向上研修 (保幼小連携) (概要)

(1) 指導案作成研修 (小学校教育研究会生活科部と合同で実施)
 市内の協力園と学校の5歳児と1年生の連携活動年間計画をもとに、担任同士で指導案を立てる。

(2) 連携活動の公開授業・保育、カンファレンス
 連携活動を公開し、事後のカンファレンスを実践者と参観者が共有し、学び合う。

(3) 実践交流会: 研修
 全協力園・校において、(1)の研修で作成した指導案をもとに実施した連携活動を記録し、実践を交流する。

保幼小接続カリキュラム策定 (概要)

- ・1年目(H28)は保幼小連携等について研修、意見交換
- ・2年目(H29)は、**具体的な議論と事例収集・検討**
- ・3年目(H30)は、接続カリキュラム策定

↓

(1) 事例の収集(0～5歳の遊び、5歳児と1年生の連携活動、小・中学校の授業)
 策定会議のメンバーが、自園の遊び(子どもの姿)の記録や他校・園の連携活動や小・中学校の授業を参観し、記録したものを事例とし、集める。

(2) 事例の検討
 3グループに分かれて、一つ一つの事例を「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」で見取り、検討する。

文部科学省調査研究委託「幼児教育の推進体制構築事業」

舞鶴市 平成29年度 乳幼児教育ビジョン推進事業

事業全体
 ◎乳幼児教育ビジョン推進事業 全体会 報告会
 ◎乳幼児教育フォーラム
 ◎行政による乳幼児保育の拠点機能研究
 ◎乳幼児教育の支援と再構築による研究
 ◎各分野をつなぐコーディネーターの育成研究

乳幼児教育ビジョンの周知
 ◎講演会、説明会等の開催
 ◎ビジョン通信の発行
 ・家庭向けにビジョンの内容をわかりやすく発信

保幼小接続カリキュラム策定研究
 講師: 尾道市立大学教授 (尾道教育大学大学院) ◎カリキュラム策定会議
 ◎保育士、幼稚園、小学校、中学校の保育者・教員等
 ◎0～15歳を切れ目のない保育・小中連携カリキュラム
 『まいつぶさ15』(仮)の検討
 ◎事例収集・研究
 ◎保幼小中連携研修
 ・全国・全国対象

乳幼児教育の質向上研修
 対象: 保育所・幼稚園、小学校
 全体講師: 尾道市立大学教授 (尾道教育大学大学院)
 講師: 尾道市立大学教授 (尾道教育大学大学院)
 ◎公編・カンファレンス
 ◎公編・グループワーク
 ◎公編・カンファレンス
 ◎グループワーク(ドキュメンテーション) 夏空研究会共同研究発表 他

子どもを主体とした保育
 講師: 尾道市立大学教授 (尾道教育大学大学院)
 ◎公編・カンファレンス
 ◎公編・グループワーク
 ◎公編・カンファレンス
 ◎グループワーク(ドキュメンテーション) 夏空研究会共同研究発表 他

保幼小連携
 講師: 尾道市立大学教授 (尾道教育大学大学院)
 ◎公編・カンファレンス
 ◎公編・グループワーク
 ◎公編・カンファレンス
 ◎グループワーク(ドキュメンテーション) 夏空研究会共同研究発表 他

乳幼児教育の推進体制構築事業検討会議
 文部科学省の調査研究委託事業の実施について、研究員、委員の検討、研究結果の分析やとりまとめ、普及等の意見を踏まえて設置しているもの。

研修	日時	内容
ドキュメンテーション研修 (フレッシュ向け)	平成29年6月23日(金)	グループワーク: 事例をもとにドキュメンテーションを書いてみよう 指導: できる講師のドキュメンテーションへ発言等
ドキュメンテーション研修 (保育リーダー向け)	平成29年7月24日(月)	グループワーク: ワークシートをもとに事例を検討する 講師: 「ドキュメンテーション」中の保育を振り返り、振り返りを書いてほしい10の姿をとる!
公開保育 (八音保育園)	平成29年8月12日(火)	公開保育・グループワーク・カンファレンス
ドキュメンテーション研修 (各園から持ち寄る)	平成29年10月11日(水)	グループワーク: ワークシートをもとにドキュメンテーションを検討する 指導: 事例のドキュメンテーションへ発言
公開保育 (永福保育園)	平成29年10月12日(木)	公開保育・グループワーク・カンファレンス
ドキュメンテーション研修 (各園から持ち寄る)	平成29年11月8日(水)	グループワーク: ワークシートをもとにドキュメンテーションを検討する 指導: 事例のドキュメンテーションへ発言
公開保育 (中興幼稚園)	平成29年11月8日(木)	公開保育・グループワーク・カンファレンス
公開保育 (うみべのもり保育園)	平成29年12月7日(木)	公開保育・グループワーク・カンファレンス

研修	日時	内容
第1回 指導案作成研修 (小学校教育研究会生活科部と合同で実施)	平成29年8月18日(金)	グループワーク: 連携協力園・校ごとに連携活動の指導案作成 講師: 「連携におけるカリキュラムマネジメント」計画(指導案)及び「評価(記録・省察)」の重要性
第2回 公開授業・保育カンファレンス	平成29年11月13日(月)	中庭小学校3クラスとなかす七保育園1クラス、池内幼稚園2クラスがクラス単位で連携活動を実施、公開
第3回 実践交流会	平成30年1月30日(火)	記録した連携活動の実践を交流

※3回連続研修という形式で、5歳児と1年生の保育者・教員が一緒に学び合えることも大切にしている。

保幼小接続カリキュラム策定会議の開催

日時	内容	場所
平成29年5月25日(木)	・小中一貫について ・昨年度の振り返り ・0～15歳までをつなぐ保幼小接続カリキュラムのイメージの共有 ・意見交換	船工観光センター4階 展示交流室
平成29年7月13日(木)	グループに分かれて、0～5歳まで子どもの姿の事例を検討 ※事例を10の姿で読み取り検討する。	西館合会議室4階 第1会議室
平成29年10月26日(木)	グループに分かれて、連携活動の事例を検討 ※事例を10の姿で読み取り検討する。	市役所6階 大会議室
平成30年1月18日(木)	グループに分かれて、小・中学校の事例を検討 ※事例を10の姿で読み取り検討する。	市役所6階 大会議室

保幼小中連携研修

日時	内容	場所
平成29年5月25日(木)	講演「乳幼児教育と学校教育をつなぐには～幼児期に育ってほしい10の姿から～」 講師: 清池 和成氏(兵庫教育大学大学院 教授)	船工観光センター4階 展示交流室

(1) ドキュメンテーション研修

【目的】
各園で書いているドキュメンテーションをもとに保育を振り返り、保育について検討することで…
◎子どもの姿、言葉(事実)から、育ちと学びを見取る。
◎保育者のねらい、関わり、環境を考える。
◎保育には様々な見方や方法があることを知る。
◎年齢発達をとらえる。



③ドキュメンテーションを書く視点、見る視点 (ワークシート)

- ☆遊びの様子(きっかけ)
- ☆子どもの姿、言葉、思い
- ☆保育者の言葉かけ、関わり、意図
- ☆環境(意図的な環境)
- ☆学び、育ち
- ☆これからの保育の展開



※色分けするとわかりやすい

(3) 経過報告

種別	日時	内容
ドキュメンテーション研修 (フレッシュ園)	平成29年6月23日(金)	グループワーク:事例をもとにドキュメンテーションを書いてみよう 推薦:ドキュメンテーションを見て助言
ドキュメンテーション研修 (保育リーダー園)	平成29年7月24日(月)	グループワーク:ワークシートをもとに事例を検討する 議題:「ドキュメンテーションの中の保育を幼児期の視の分まで書いてほしい」の意をどう伝える?
公開保育 (八雲保育園)	平成29年9月12日(火)	公開保育・グループワーク・カンファレンス
ドキュメンテーション研修 (各園から持ち寄り)	平成29年10月11日(水)	グループワーク:ワークシートをもとにドキュメンテーションを検討する 推薦:事例のドキュメンテーションへ助言
公開保育 (水福保育園)	平成29年10月12日(木)	公開保育・グループワーク・カンファレンス
ドキュメンテーション研修 (各園から持ち寄り)	平成29年11月8日(水)	グループワーク:ワークシートをもとにドキュメンテーションを検討する 推薦:事例のドキュメンテーションへ助言
公開保育 (中舞鶴幼稚園)	平成29年11月9日(木)	公開保育・グループワーク・カンファレンス
公開保育 (うみべのもり保育所)	平成29年12月7日(木)	公開保育・グループワーク・カンファレンス

【概要】

- ①対象者を分ける
初めてドキュメンテーションを書くフレッシュと保育のリーダーとなる保育者とに分けて実施
⇒対象者に合わせた内容
方法や事例を園内研修として利用
- ②グループワーク~自分の書いたドキュメンテーションを検討
ワークシートを使って、ドキュメンテーションを見る視点(書く視点)にもとづいて協議
⇒保育を語ることで、様々な視点で見ること



(2) 公開保育

- 【目的】
◎乳幼児教育ビジョンの基本理念「主体性を育む乳幼児教育」の推進に向け、研修等を通じて、園・校種、公私を越えて共に学び合う。
◎公開保育を通じて、実践者も参加者も互いに保育を振り返り、学び合う機会とし、質の高い乳幼児教育を目指す。



中舞鶴幼稚園

3歳児

豊かな感性と表現
思考力の育成

机を囲んで道具や素材と関わりながら、子ども同士のやりとりが生まれる

5歳児

協同性
社会生活との関わり
豊かな感性と表現

秘密基地、落とし穴、魚釣り…
イメージをストーリーへとひろげていく

学んだこと

- ☆子どもの興味・関心や遊びの様子をもとに環境をつくる
 - ・机、いすの位置、数、サイズ
 - ・イメージを豊かにするためのモノ(素材、教材)
 - ☆遊びをつなげる
 - ・山での遊び(秘密基地、落とし穴、魚釣り…)のイメージをふくらませ、ストーリーへと広げる。
 - ・日々の遊びや生活をつなげて行事にいかす。
 - ☆子どもの主体性を支える関わり
 - ・チャレンジを支える、待つ。
 - ・間違いを否定せず気づかせる。肯定的に経験とともに伝える。
- ※遊びをより楽しく、より継続するためには…環境の工夫、教材・素材が大事

公開保育の研究テーマ・視点

【公開保育研究テーマ】
中舞鶴幼稚園では、人が人として育つための土台を形成すること、想像力、創意工夫する力、探究心や表現力、意欲、粘り強さなどの非認知能力を育てることを大切に、将来大きな木へ成長させるため、心のねっこを育てることを保育目標としている。子どもの興味・関心をもとに環境を構成し、その遊びを充実させ、友達との関わり、人との関わりを深める保育を目指している。
【公開保育の視点】
①子どもの興味・関心をもとに環境が構成され、遊びが展開しているか
②保育者や友達と関わっているか
このような視点の姿が見られるか保育の中で見とってほしい。

4歳児

自立心
自然との関わり

日々、自然や身近な素材に関わることで気づきや発見がある

いもづるの長さ、どんぐりの重さ比べなど経験してきたことを子どもや保護者に発信

八雲保育園



風船を目で追う、登る、すべる、跳ぶなど年齢発達に合わせた環境



こだわりのケーキ、コーヒー、ジュース
素材に触れる、没頭する経験から、おイメージをふくらませるモノを高くすることで、
こだわりの生まれ、リアリティのある遊びへとつながる



気付きや問いを誘いかける展示

公開保育の研究テーマ・視点

【公開保育研究テーマ】

毎日、子どもペースで遊ぶ「子ども時間」から1日がスタートし、子ども達が自らの興味、関心をもとに遊びを選び、異年齢で交流しながら活動している。又、そこで得た発見や気づき、つまづきなどを保育者と子ども達がふり返りの中で共有し、明日の保育へとつなげている。

【公開保育の視点】

子ども自身が興味・関心をもとに選んだ遊びの中で、子ども自ら考え遊んでいるか、工夫をしているか、自分の思いや発見を言葉にしているか、友達同士で伝え合っているか、その中で学びを深めているかを意識しながら保育している。年齢発達なりのこのような子どもの姿を見とってほしい。



パン屋さん、ままごと…ごっこ遊びを通して、友達と先生とやりとり
ごっこ遊びのイメージが広がる環境



3歳児が自己発揮する場所と5歳児に憧れ、見て学ぶ場所が互いに見える、近い距離にある

学んだこと

- ☆環境・教材の豊かさ～日々の子どもの姿から準備
 - ・子どもの興味・関心をもとに、年齢発達を考慮して整える。
 - ・気づきや問いを誘いかける展示や、試したり、思考したりするための素材、道具の工夫
- ☆保育者の肯定的な関わり
 - ・発言、問いやマイナスな言葉に対してすべて肯定的な言葉
 - ・問いかけの言葉や好奇心・意欲を促す関わり方が探究心を深める。
- ※一斉に同じことをするのはなく、小規模な設定保育が同時進行で行われている。
- ※没頭して遊び、そこにこだわりが生まれ、よりリアリティのあるものへとイメージをふくらます…そのための環境が大事

うみべのもり保育所



身近な人と気持ちが通じ合う
保育者は一人一人の子どもの声・動きに反应的に関わる。
安心して遊ぶ。



おみせ屋さんごっこ…お店に必要なモノを作る、店員さんになる、お客さんになる 役割分担を楽しむ。
本物に近いモノを作りたくなる道具、素材…



一人一人オリジナルの思いのこもった作品

公開保育の研究テーマ・視点

【公開保育研究テーマ】

子どもの主体性を育む保育を目指し、乳児期には、安心できる保育者との愛着・信頼関係を築くために応答的な関わりを大切にしている。幼児期はそれを基盤に、子どもが興味・関心を起点にして遊びを広げ、より深く考えたり、探究したりできるように環境を構成し、関わっている。その中で得た様々な発見や気づきを保育者や友だちと共有し、次の遊びへとつなげている。

【公開保育の視点】

安心できる保育者のもとで好きな遊びを選び楽しんだり、年齢なりに自分の思いを行動、表情、言葉などで表現しようとしていたりする姿や、興味・関心を起点に遊びを広げ、考え工夫する中で様々な発見をしたり、友だちや保育士に伝え合ったりしている姿を見とってほしい。その中で、保育者は、子どもが主体的に遊び込める環境を構成し、関わっているかを見とってほしい。



お客さんに見てもらおう、相手の顔の気持ちにたって考える、見られること、見てもらうための工夫。
子どもたちで考えた衣装、フォーメーション、振付



自然物や身近な事象に関わり遊び込む中で、気づきや発見がある。
子ども自身が振り返りで伝える。

学んだこと

- ☆自分で決める、自分で考える、自分から待つ
 - ・安心、信頼、愛着が基盤となる。
 - ・待たされる指導ではなく、目的があり見通しを持って待つ経験を積み重ねる。
- ☆子どもの発達をふまえた教材研究、環境構成
 - ・色、形、音、動き、触る等の経験ができる環境
 - ・子どもが考え、工夫することが可能な素材や道具
 - ・没頭、探究につながる環境と関わり
- ※遊びが発展し、育ちや学びにつながるモノ(教材)という視点を持って教材研究をする。

永福保育園 (分園：城屋園舎)



思考力の発生と 協同性
自然との関わり
机、いす…やいどりが生まれる環境



運動の中心と体
体を思いっきり動かして

公開保育の研究テーマ・視点

【公開保育 研究テーマ】
◎1歳児～5歳児まで15名の子どもたちを自然豊かな環境のもと、少人数でアットホームな雰囲気を大切にしながら保育している。異年齢の子ども同士が遊びや生活を通じて関わり合いながら、人と人のつながりを深めていけるように見守っている。

【公開保育の視点】
◎異年齢、少人数の環境ならではの関わりや子どもの育ち



言葉による伝え合い
自然との関わり
同年齢の子ども同士が集まって会話

学んだこと

◆環境として自然の豊かさをいかす
・周辺だけではなく、園内にも自然を取り入れる。
・4、5歳児はイメージしたものに近づけたり、リアリティーを追求したりしようとする。それを実現するための道具や素材

◆子どもの自己発現を大切に
・安心できる居場所
・一人一人の言葉や思いに丁寧に関わることのできる少人数の良さをいかす。

※グローバル化、情報化社会で生きていく子どもには、与えられたことに対して答えを出すだけの力ではなく、発想力や想像力、創造力が必要

中舞鶴幼稚園



「振り返り」



保育者・子どもの言葉を持つ
子ども：友達のことを聞く
発言するのが楽しくなった

主体性・自主性をもって遊べる環境構成

主体性に任せて遊ぶ環境 大丈夫?...危ないのでは？
しかし、子ども達の成長、時期を考えれば...大丈夫、保育者も見通しが持てる

↓
子どもが何に興味を持っているのかを見ながら遊びやすい環境を工夫する(置き方、高さ、数)



遊び方が変わった!

「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」

子どもの遊びの様子をみながら「10の姿」を意識するように子ども達の姿からそれが見えてきた!



保護者に発信していきたい

Q 初めて公開保育を受けていただきました。その中で学んだこと、公開をきっかけに変化したこと等教えてください。

【5歳児担任より】
「主体性・自主性をもって遊べる環境構成」「ふりかえり」「10の姿」を意識するようになったのが大きな変化だと思います。

「主体性・自主性をもって遊べる環境構成」については、学年が小さいとそれにまかせると、危険を伴わないか、など不安もありました。しかし、子ども達の成長や時期をみて様子が見通しができるようになると、今、どんなことに興味を持っているのかを見ながら遊びやすい環境を工夫するようになりました。

3歳児では、今までおもちゃが部屋中にちらばっていましたが、おもちゃコーナーの高さや置き方などを変えたことで遊び方が変わったと感じています。また、使えることを見極めたうえで、ハサミなども自由に使えるようにすると、作りたいものを作って制作を楽しみ、片付けも上手になりました。

4・5歳児でも、少しでも遊びの興味・関心の幅が広がるようにと、常に廃材を置くようにしたり、外遊びでも何に興味を持ていそうかを見極めて、それが発展していくような工夫や仕掛けをいっそう心がけるようになりました。

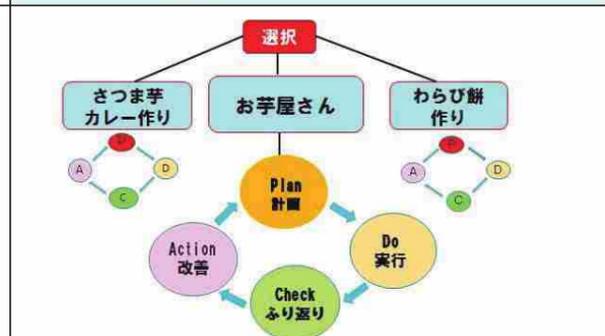
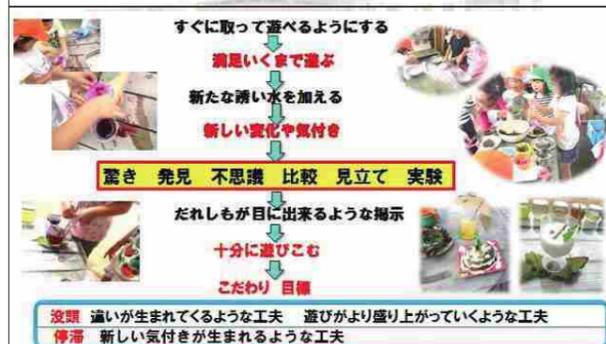
遊びを子ども達の主体性にまかせたことで、子ども達自身も、考えたり工夫することが自然にでき、以前よりも意欲的に遊ぶようになったと思います。

「ふりかえり」については、昨年度の幼小連携をきっかけに、少しずつ取り組み始めてはいたのですが、公開を受けることをまたきっかけにし、どの学年でも「ふりかえり」をするようになりました。なかなか発言できない子に対しては、無理強いせず待ってみたり、聞くだけの参加でもよいことにしています。4・5歳児では、友達の話すこともよく聞き、相づちをうったり共感したりできる姿もみられるようになりました。自分の話を聞いてほしいし、話すことが楽しくなってきたようです。

「10の姿」を、遊びをみながら意識するようになり、そして子ども達の姿からそれが見えてきたことで、自分の保育が間違っていないと思え、安心感につながりました。また、これを保護者と共感していくことも大切だと考えています。保護者は子育てに熱心な人が多いので、私たちの思いや「10の姿」の大切さ、遊びを通して子ども達が力をつけていることをこれからもクラスだよりなどでうまく保護者に返していきたいと思っています。



公開園からの報告



Q遊びを楽しく、おもしろくための工夫や保育者の意図を感じる豊かな環境でした。また、教材も充実しており、日々、研究されていることがうかがえました。環境構成にあたり、どのようにされているのか教えてください。

【5歳児担任より】

環境設定にあたっては、子ども達の中に育ってきたものに基づくことを鉄則としています。乳児組では、遊び道具の種類や置き方には、子ども達の知的な育ちや、運動機能の発達などを考慮にいれます。又、幼児組では、遊びに応じて、机の高さや置き方を調整したり、製作コーナーでは、子どもの育ちと遊びを見ながら、その興味や発達に応じて、種類や数を少しずつ増やして行っています。

又、まだ十分に遊べない時期と、どんどん遊べるようになっていく時期、更にその先の時期とでは各コーナーの配置も変えてはならないと考えています。たとえば色水のコーナーでは、4月であれば机に数人分の道具を並べたり、花殻や石鹸などを置いてみたり、やりたい子がすぐに取って遊べるようにします。それを使い、満足いくまで遊び込んだあと、時期を見計らい新たな誘い水を加えていきます。今年ですと、柚子やレモン汁、小麦粉、片栗粉、炭酸ソーダなどを置いてみました。すると、同じ遊びの繰り返しの中に、新しい変化や気づきが生れます。自分のイメージした色水とまったく別の色水が出来上がることがあるのです。ここで子ども達は驚きや発見、不思議を感じることに、4・5歳児になると比較や見立て、実験などの姿も見られるようになってきます。又、出来上がった色水やケーキは作品です。大切に取扱い共に、誰しもが目に見えるような掲示を工夫することも次の遊びへとつながる環境になります。

十分に遊び込んだ後は、個々にこだわりが生まれ目標を持った遊びへと深化していきます。例えば、「金色のスペシャルジュースを作る」と探求を始めた子がいました。これは単に何と何を混ぜればできる、というものではありません。自分のイメージに近づける為に材料の工夫はもちろん、その量や擦り方の力の入れ具合、更には光の当て方にまで工夫する姿が見られました。公開の日子ども達はまさにこの段階にあつたのです。

環境設定にあたっては、遊びの没頭と停滞の見極めも大切だと考えています。没頭している時には、そこに違いが生まれるような工夫や、遊びがより盛り上がるような工夫をし、停滞している時には、こういうことも出来るんだと、新しい気づきが生まれるような工夫をし、遊びの見取りや記録を行っています。

実際のことで言うと、没頭している時の「違いが生まれるような工夫」とは例えば色水のコーナーでいうと、先程の柚子やレモン汁、小麦粉、片栗粉、炭酸ソーダを置いたことであつたり、大きさや形の違うグラスを用意したことなどが当てはまります。又、「遊びがより盛り上がるような工夫」とは、ごっこ遊びをイメージできるようなカウンターを置いたことなどがそれです。停滞している時の「こういうことも出来るんだと新しい気づきが生まれるような工夫」とは、保育士がモデルとなり遊びにはいったり、見本を置いてみたりすることです。

又、園庭全体としての風景や遊びと遊びの距離感にも気を配っています。例えば、3歳たんぽぽドームは最初、園庭の端の方で後ろを向いて並んでままごとをして遊んでいました。その環境のなかでは、個々に没頭して遊び込む時期をたっぷり満喫したと考えます。その後子ども達に必要な環境は、会話が生まれてくるような場です。子ども達が丸くなって、お互いの遊びを目にしなが楽しい会話が生まれる姿を想像し、たんぽぽドームの位置を変えてみました。予想どうり、そこでは、やりとりや会話が生まれ、ごっこ遊びへと発展していました。

環境はただ置けばいいのではなく、子ども達の姿からより良く変えていけるよう、日ごろから子ども達の様子を職員間で共有することにも努めています。子どもがこんな事をしていて、こんな事を言っていた、こんな発見をしていた、その事から「これを置いたらどうなるかな」「この場所よりこっちの場所の方がよいのでは」など日々見直しをおこなっています。

Q遊びが繋がっている、遊びの本質(学び)が繋がっていると感じます。公開保育前から、公開後につながっている遊びがあれば教えてください。

秋になると、子ども達の知的な学びは更につながりや深まりを見せてきます。それに合わせ、戸外でしてきた遊びを室内で更に本物で展開しようと、年長組でお芋屋さんごっこを企画しました。ここに至るまでの活動のつながりは、苗植えから経過観察、収穫、栄養であるデンプン取り、デンプンからのわらび餅作り、そして最後、実際のさつま芋を口に入れる所まで活動が繋がっています。お芋屋さんごっこの企画は、保育士側からの意図ももちろんありますが、子ども達が泥のケーキを見ながら「これ食べたいなあ。でも食べたらゲーでるけど」などと話していたこともきっかけの一つです。

お芋屋さんごっことは、さつま芋を切ってホットプレートで焼き、お店を開こうというのですが、全員で一斉に一回きりの活動として体験させるのではないのが当園のこ

わりです。こうした活動も遊びの一貫として、子ども達の主体性を大切にしています。その為に最初に行ったのは選択です。今回はさつま芋カレー作り、お芋屋さん、わらび餅作りの三つから選択の末、それぞれ意志の決定を行いチームを作りました。色々な経験を重ねてきた子ども達は、常に自分の選択肢をもち、遊びや活動を選ぶことが可能です。自分で決めることこそが主体性の基となると考えています。やりたい子が集まるチームの中では同じ目的の基、イメージを共有した話し合いが充実し、やり方やそれまでに必要な準備について意見を出し合います。

お芋屋さんチームの最初の話し合いで「型を抜く」「ホイップで飾る」といった言葉が出てきたのは戸外での遊びの経験があればこそと感じます。このようにして当園では5歳児はチームでの話し合いを基にした活動展開を大切にしています。たくさん出てくる意見を、とりあげたり、つなげたり、まとめたりするのは保育士の役割です。このようにして話し合うことで、皆で吟味し、それぞれに見通しをもって実行する事になります。話し合いは活動後「振り返り」としても行います。そこから、「今日はどうだった」「次はどうしたい」という次へのきっかけやつながり、見通しが生まれます。

1回目の活動後の振り返りの中には「石鹸ホイップは水で固さが変わるけど、本物のホイップは固くするのが難しい」といった言葉や、「チケットがあったほうがいい」という言葉「最後の人の芋は固くなってしまおう」という言葉がありました。

2回目にはさらに、ホイップの固さを追求したり、工夫をこらしたチケットを作ったり、最後の人までおいしく食べてもらえるようスチコンで下準備したり、このほかお客さんをお迎えするためのウエルカムボード作り、おもてなしの心を表すお花飾り、巧な言葉での接客も見られるようになり、より本物らしく、より人にみせようという「他者」という視点がうまれていました。その際の振り返りには「さつま芋は固くて型を抜くのがたいへんだった。デンプン取りの時と同じで黄色が一番固くて、次に紫色、オレンジ色が一番柔らかい」という言葉などがあり、1回目の言葉も含め、戸外での、ごっこ遊びの中での体験や、さつま芋収穫、デンプン取りの体験から、学びがどんどんつながっていることを実感しています。

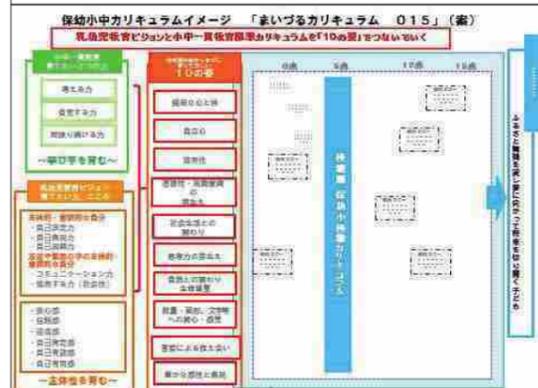
このように進めていくと、活動中も保育士が「やりましょう」と号令をかけるようなことはまったく必要ありません。話し合いを基に、子ども達は心づもりをしながら思いを実現させていきます。当園で大切にしていることは思いを実現できる場を作ること。この場こそが当園の環境設定そのものなのです。

保幼小接続カリキュラム 策定会議報告

保幼小接続カリキュラム策定会議

- ・1年目(H28)は保幼小連携等について研修、意見交換
- ・2年目(H29)は、**具体的な議論と事例収集・検討**
- ・3年目(H30)は、**接続カリキュラム策定**

日時	内容	場所
平成29年5月25日(木)	・小中一貫について ・昨年度の振り返り ・0～15歳までをつなぐ保幼小接続カリキュラムのイメージの共有 ・意見交換	商工観光センター4階 展示交流室
平成29年7月13日(木)	グループに分かれて、0～5歳まで子どもの姿の事例を10の姿で読み取り検討する	西研合会議4階 第1会議室
平成29年10月26日(木)	グループに分かれて、連携活動の事例を検討 ※事例を10の姿で読み取り検討する	市役所 5階 大会議室
平成30年1月18日(木)	グループに分かれて、小・中学校の事例を検討 ※事例を10の姿で読み取り検討する	市役所 5階 大会議室



事例収集・検討する中で…

◎記録
実践を記録することの難しさ
⇒子どもの何を見るのか？育ち・学びをどう捉えるのか？
自分自身の視点を持つ必要がある。

◎事例の検討
幼児も小学生も保育や授業を通して、主体的に考え、工夫し、試行錯誤する姿、新たな気づきや発見をする姿は共通している。
⇒0～15歳を「**幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿**」で共有し、つなぐ。

保幼小中連携研修会

日時：平成29年5月25日(木)
場所：商工観光センター4階 展示交流室
講演：「乳幼児教育と学校教育をつなぐには～幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿から～」
講師：兵庫教育大学大学院 溝邊 和成 教授
※市内の保育所、幼稚園、小・中学校が参加

「つながり」の要として「10の姿」を保幼小中へ共有

保幼小接続カリキュラム策定の方向性

当初…5歳と1年生の接続期に限定し、カリキュラムを策定するつもりだった…しかし、議論を進めていく中で拡大

『舞鶴市教育振興大綱』
「ふるさと舞鶴を愛し、夢に向かって将来を切り開く子ども」の育成をめざし、「**10歳～15歳までの切れ目ない質の高い教育の充実**」を図る。

乳幼児教育ビジョン(0～5歳)と小中一貫教育標準カリキュラム(6～15歳)を「**幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿**」でつなぐ。

仮称「まいつるカリキュラム 015」の策定へ

保幼小接続カリキュラム策定会議

会長：溝邊 和成(兵庫教育大学大学院)
私立保育所園長代表、同保育士代表各2名
私立幼稚園園長代表、同幼稚園教諭代表各2名
公立保育所・幼稚園長各1名、同保育士代表1名
小学校長代表1名、小学校教諭代表2名

保育所・幼稚園等の関係団体から代表者を選出

※新たに 中学校長代表1名 同教諭代表1名を加える(全17名)



事例収集・検討する中で…

◎記録
実践を記録することの難しさ
⇒子どもの何を見るのか？育ち・学びをどう捉えるのか？
自分自身の視点を持つ必要がある。

◎事例の検討
幼児も小学生も保育や授業を通して、主体的に考え、工夫し、試行錯誤する姿、新たな気づきや発見をする姿は共通している。
⇒0～15歳を「**幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿**」で共有し、つなぐ。



【副会長より】
策定会議の目的…0歳から15歳の子どもの成長の視点に立ち、成長に合わせた円滑な教育の流れを構築するため、保幼小中の教員がともに学ぶ連携の機会を持ち、乳幼児期の学びと育ちを学校教育につなぐ切れ目ない質の高い教育について理解を深める。

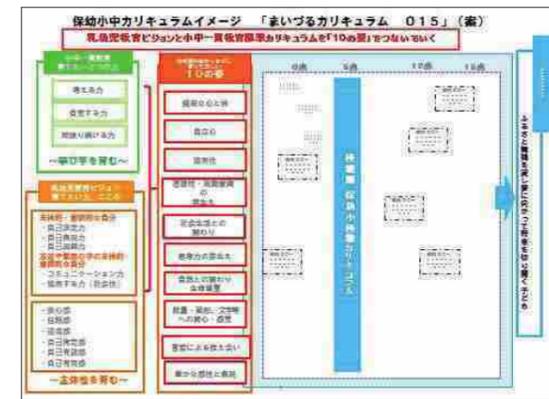
保幼小連携活動(生活科の授業)を中心に、小学校、中学校、小中連携活動など、様々な授業をみせていただく機会をいただいた。多くの保幼小連携活動を参観させていただく中で、実際に、多くの写真をとり、子どもの会話に耳をすませ、記録をもとに「シートにまとめよう」とするが、初めの頃はどの場面を選ぶかが難しく、迷った。シートを作成する中で、指導者が、子どものどんな姿を育てるために、働きかけ、子どもにどんな変容が見られたかに視点を当てて作成した。授業を見る中で、いつも感じたことがあった。幼児であっても、活動を通して、新たに気付いたり、発見したり、友達と、または小学生と一緒に調べたり、試行錯誤しながら工夫改善したりする、主体的に生き生きと活動する姿があった。自分の作った作品を自慢げに見せて話す姿があった。そして、回を重ねることに、ペアの子の名前を覚え、幼児をやさしくリードする小学生。子ども同志で仲良く相談しながら、どんどん工夫を重ねていく発想力に感動するとともに、乳幼児期の遊びや生活の中に、すでに学びが確かに芽生えていることを実感した。

学びの芽生えを小学校の学習にどう円滑につなげていくかを考えたとき、策定委員の先生方とシートをもとに交流する中で、幼児期の姿や小学校期の姿をお互いが理解し合い、育てたい10の姿を共通の言語として共有し、教育観や評価観を共有しながら、連携活動の場を工夫したり、それぞれの発達段階においてどんな力をつけるのかを明確にしてカリキュラムを考えていくことが必要であると感じた。小中一貫教育の目指す「育てたい子ども像」を共

有することも同様である。
策定委員会での会議の中で、また、授業を通して、兵庫教育大学大学院 教授 溝邊和成先生から多くのご指導をいただいた。その中でも、わたしにとって、一番の学びであったことは、「互恵性のある連携活動をするための授業改善」についてである。相手意識や目的意識を明確にし、1時間の見通しを持てる授業、子どもにとって活動しやすい環境構成の工夫には、様々な要素があった。材料をおく場所や試してみる場所の設定、ほどよい広さや空間、活動のあしあとの可視化、子どもの活動を促すための教師の言葉かけやサポートの仕方、子どもの活動を十分保障する時間配分、1時間の流れがわかる板書の工夫、評価の観点などである。授業の最後に、小学生は「作って何に気づいたか。どんな工夫ができたか」について、幼稚園児は「どんなものが作れたか。」について振り返りをするのが、次の活動への意欲につながっていった。

0歳から15歳までの切れ目ない質の高い教育を進めるうえで、「伝え合う言葉の力」を育てることの大切さを再認識した。体験を通しての気づきを友達と交流することで学びは深まる。幼児期から、その子ならではの気づきや豊かな感性を育てること。そして、小学校では、気づきの質を高め、自分の思いや考えを筋道立てて話せたり、豊かな言葉で表現できたりする力を育成することが、すべての学習を支える基盤となり、中学校へと接続していく。このような幼児期からの積み上げが、新指導要領の目指す「主体的・対話的な深い学びの力の育成」につながっていくのだろうと感じた。

【溝邊和成会長より(兵庫教育大学大学院教授)】
『カリキュラム』というものを考えた時、カリキュラムとは『学びと育ちの白地図』だと考えてはどうだろうか。その『白地図』に色が塗られた結果が、ドキュメンテーションではないかと考える。



接続カリキュラムを作成するにあたり、当初は保育所・幼稚園と小学校の接続の部分だけを考えていた。しかし、話し合いの中で、0歳から15歳までの切れ目ないカリキュラムを作ることで、生涯学習社会を生きていく子どもの姿になっていくのではないかと、ということになった。

0歳～15歳までの切れ目ないカリキュラムを作っていくうえで、保育所・幼稚園から小・中学校の先生までが参画して話し合いを行うことが大切であり、そのことにより、カリキュラム策定に向けた取組が、進歩してきたのではないかと考える。この記録(事例)は、『白地図』に色が付き、形を変えて姿を現したものであると言える。これがカリキュラムのベースになっていく。



ドキュメンテーションを作成するうえで、独りよがりになるのではなく、必ずフレクションつまり、カンファレンスを伴わせて考えていくことが大切であると考え。その場合、ドキュメンテーションに欠かせない写真をどう見るか、どう撮ってきたかということや、子どもの姿(行動)、出てきた言葉、心と体を見ていくことが大切である。子どもが作っている作品、例えば砂遊びの際にスコップで掘った穴ですら、子どもの思考の流れがあったり、思いがあふれているということなどをどれだけ読み取れるかが大事ではないか。時系列で語られているかが重要であり、隣接学年でどう動いて、どう育っているかという視点で掘り下げると連続したカリキュラムになるのではないだろうか。

白梅学園大学大学院 特任教授 無藤 隆 先生
神戸大学大学院 准教授 北野 幸子 先生

(北野先生(以下:北))舞鶴市の「研修に携わらせていただき6年になります。いつも「保育は実践から」と言っていますが、公開保育のありかた、方向性について教えて下さい。

(無藤先生(以下:無))公開保育は、園以外の専門家に見てもらおうことであり、それをめぐって話し合うこと。

自分でやっていることは、自分で見えないものである。前提として、違うクラス、年齢で見あって話し合い、園内で共有すること。これ自体忙しい中おこなうのは難しい。1〜2時間見合うのは難しいが、交代で20分ずつ見るなど工夫するとよい。まずは何があったか、見ているのと違うことがある。同じ事をメンバーを変えて何度も重ね、見せるだけでなく見る側にまわる。これらを素材に語り合い学び合う。立派な保育を見せるのではなく、荒探りでなく、欠点や不十分な点をお互い見合う。子どもが30人いたら一人一人のつぶやきは見逃すこともあるが、何とかするのは、環境が充実しているからではないか。

私は見る側であり、現場から来たのではなく、保育はできない。しかし、傍から見ている方が色々解ることもある。保育は環境の力が大きい、それだけでは育たない。

私は助言者であり、それをめぐって語り合う。意見が正しい、正しくないでなく、色々と思いをめぐらすことで、自分とは違う視点、当たり前がそうでなかったり、意識せずに行っていることが良かったり、違う捉え方もある。それが公開保育である。

(北)公開保育のスケジュール以上に公開保育を希望する園が増えていることを嬉しく思う。同僚性の高まりを感じ、チームとしての育ち、一体感、尊敬し合うことにつながると考える。

研究者は、「私だったらこう見る、こうする、なぜなら子どもが～していたから、～と言ったから」と構造的に物を考える習慣がある。要するに、構造的に考えることがポイントではないか。

ドキュメンテーションの研修では、「キャリア別」に開催したり、記録の中に見られる

(無)ドキュメンテーションとは、イタリアのレッジョ Emilia から広がった。普通の言葉でいうと、保育を記録しそれを共有すること。

保育を記録し、保育者間で見せ合い、保護者や子どもに見せ一緒に考える。専門家だけの中でやっていたことが、保護者、子どもへと広がってきた。

子どもの言葉は記録しやすいが、写真を使うことで、まわりのものが見える。「穴を掘っている」という言葉だけでは解らないが、写真を使うことで、状況や環境がよく解る。自分の言葉や関わりを録音し、音声記録をパソコンで操作すると、3時間をもっと短い時間で聞くことができる。

自分の声、子どもの声が入ると、だいたい何をやってののか解る。意外と自分の記憶と違ったりするので、自分がいかに喋り過ぎているか、また、子どもが自分に喋りかけていることに、気付いていないかが解る。ドキュメンテーションとは、そこで起きていることを拾い出し、子どもと共有し、振り返り、この先何をするか考え、相談することである。

今日の発表では、そこでの学び、分析を入れるものになっている。カリキュラムに対応させること、ねらいを示すこと、その日その日の子どもに合わせる事が大事である。ドキュメンテーションに出てくる子どもの実際を、全体計画と合わせ、ドキュメンテーションを分析し、学びを取り出すことが大切である。

(北)現象である実践は、活字記録のみではなく、写真によって環境や多くの情報が共有できるのではないか。

「子どもが～した」「～と言った」「～な育ち」といったことや保育士の意図、5領域、10視点からの育ち・学びまでは書けている。今後は、教師の援助や具体的な関わりも書いていくことが課題ではないかと考える。

(無)「育みたい資質・能力」「10の姿」を保育を見直す道具として使うと、整理しやすく見やすくなる。

「誘い水」というおもしろい表現があった

が、遊びが停滞している時のヒントやきっかけ作りであり、子どもが関わっている不思議なこと、おもしろいことがどうしたら発展するか? こういう道具を使ったら、これとつなげたらおもしろいなど、保育者が働きかけていくことも大切ではないか。

どこかの園の音遊びに、いらなくなった楽器の上にビー玉を転がして、太鼓に当てるというものがある。大胆だがそういった発想やおもしろさ、不思議さ、直感を大切にしたい。

(北)杓子定規ではなく、子どもと一緒に作ることや、保育者も楽しく、発見があることが大切であり、これがカリキュラムマネジメントにつながると考える。

(北)園長のリーダーシップとして、園をどう変えていくか、何を指すのか。補助金のあり方等、条件の中で考えていってはどうか。建物改修や庭の改造等、行政は、リーダーシップを後押しすることが大切だと考える。

(無)新制度から平行しての改革によって、行政の役割は、遥かに大きくなり、その施策や体制によって格差が広がったと考える。行政の担当者は、幼児教育をわかっている人が望ましいのではないか。

0〜15歳の教育全体に、舞鶴市が責任を持つことが大切であり、幼保、公私、幼小、小中と色々な枠を越え、接続、一貫、校種間接続、幼保対立、地域分断など、違いを越えていかなければならない。具体的な連携の場を作るカリキュラムを提供し、現場で活かすことが大切だと言える。

市長が乳幼児教育センターを作るとおっしゃった。一番大切なことは、公私種別を越えた研修。全ての保育所・幼稚園が関わられるようにし、センターの研修に参加できるようにすることが大事ではないか。

(北)行政が拠点を作ることが大事だと考える。

今日のフォーラムに全国から参加された方々には、それぞれの地域での改革の方向性が得られたのではないかと。

本市では年度毎に、事業のまとめとして、各研修の実施内容や、公開保育・授業を実施いただいた園・校の取り組みを報告し参加者の皆さんと情報や学びを共有するとともに、1年の事業を振り返り、学びを深めることを目的として、報告会を開催しています。

今年度は市外の各関係機関の皆様にもご案内をし、「乳幼児教育フォーラム」を開催しました。白梅学園大学大学院 無藤 隆 特任教授をお招きし、指針・要領等の改定(訂)のポイントやこれからの乳幼児教育について、ご講演いただいたり、本市の取り組みについて、その成果等を報告することで、参加者の皆さんとともに学び合い、乳幼児教育への理解を深めるとともに、質の向上を図るための体制作りについて考える機会となったことが、アンケートからも伺えます。

(1)特別講演について

【市内保育所・幼稚園・小学校】

・幼児教育の大切さ、幼児教育がいかにその後の人生に影響するのかがよく理解できた。 幼児期の大切さを社会全体で共有する中で、保育者の役割が見直され、質の高い保育が行われるようになっていくと思う。その為に保育者の研修が大切であると感じる。 保幼小連携が進んで行く中で、教育観そのものの見直しを図られ、教育全体の質の向上に結び付いていくことを願う。自然物があるだけでは環境とは言えず、それをどう子どもの育ちに結び付けるか、働きかけるかが保育の仕事であると思った。

・小学校以上の教育へと繋げていくために、乳幼児期に様々な経験や実体験が必要なのだと改めて思った。子どもが興味を持った時に、寄り添い共感したり、さらに深めていけるような言葉掛けを意識して、保育をしていきたいと思った。

・幼児教育について、ポイントを学ばせて頂いた。環境の大切さ、その環境に主体的に関わっていける、また主体的な関わりを引き出していくことが保育士の役割として、子ども達の学びや育ちに関わってほしいようにしたいと思う。

・保幼が同じ指導のもと、小学校に就学していくことの大切さ、そのためには、乳児期における活動経験や感性を育てることの大切さ、初めて子ども達が出会う事象、出会う心動かされる体験を多く持てるようなカリキュラム作成の大切さ、保育者自身の感性を磨くことの大切さを改めて感じた。

・子どもが園に来てから帰るまでに出会う物全てが教材という話が印象的で、子ども達が身近な環境に関わりながら遊び込めるよう、意図的、組織的に保育を進めていけたらと思う。

・小学校での学習に入る前の乳幼児教育について、連携活動に取り組むまでは、深く考えることがなかった。どちらかというと、家庭教育のあり方で考えることが多い。保幼小での資質、能力を身に付けるための「10の姿」については、あらためてじっくりと読み深めたいと思った。

・保育指針等の改訂にもとづいた幼児教育について知る事ができた。「10の姿」については充実感や見通し、気付きなど小学校につながる具体的な姿であることを知る事ができた。これらは小学校教育に携わる者が、認識、意識すべきものであると感じた。

【市外保育所・幼稚園・認定こども園】

・教育要領の改訂の基本的な考え方、見方を分かりやすく教えていただいた。 幼児期の教育が小学校以降につながっていくことを意識し、今、何が育とうとしているのか、明確なねらいを持ちながら進めていくと思った。

・教育要領や保育指針の改訂のポイントについて改めて学ぶ事ができた。幼児期の終わりまでに育ってほしい姿は乳児期から始まっている、と言う言葉が印象的だったので乳児期からの保育に励んでいきたい。

・今後の幼児教育の在り方について、とても分かりやすく学ばせていただいた。 幼児教育は小学校以上の学校教育につながる基礎にあたり、その基礎をしっかりと築いていけるようにしなければならぬと改めて感じた。子ども達が主役であり主体である生活、遊びが展開できるように、環境構成であったり、意図的な援助や配慮が大切だとわかった。

【行政・大学関係者】

・子どもに関わるまわりの環境すべてが教材であることを再確認した。現場にも伝えていきたい。

・新教育要領の基本的な考え方を改めて学ぶ事ができた。10の姿についてさらに詳しく知りたいと感じた。

・大変わかりやすくお話しいただき、今後目指すべき方向性について学ぶ事ができた。

(2)報告会・ドキュメンテーション展示

【市内保育所・幼稚園・小学校】

・自然環境は、そのままでは「環境」とは言

えず、それを保育者が意図的に構成することが大切であることが分かった。遊びの材料の質と量を豊かにし、活動する子どもの主体性を大切にしていこう姿勢も学んだ。没頭し遊ぶ環境作りの大切さ、子どもの遊びの中からさらに発展的遊びにつながるように、保育者が常に環境設定していく大切さを学んだ。子どもの育ちを職員間で共有することが大切であり、そのことが職員間で常に話題となる雰囲気も大切。

・遊びの没頭と停滞というどこにでもあり得る様子を見極める保育士の目や、そこにエッセンスを加えていく職員間の話し合い等、他園の報告を聞いて自分の保育を振り返ることにつながった。

・保育所は、ひとりひとりの子どもが思いを実現できる場であるために、保育者の役割は、色々な分野の専門性を学んでいく必要があるのだと感じた。特に、環境作りはとても重要で遊びの経過過程の中で、常に見つめ直し、工夫していくために、保育者間の連携も大切であり、そのために時間も必要で有効に使っていかねばならないと思う。

・園によって恵まれた環境は違うが、良い所、取り入れられる所は真似していきたいと思った。また、子どもだけでなく、保育者も楽しむことも大切で「共感、共有」が大切だと思った。

・5領域、「10の姿」の分析等、保幼の先生方が日々子どもを捉えるにあたって、記録をとったり、交流をしてこられていることを知った。保幼小の交流に向けて、もっと子どもの姿と一緒に話していくことが必要だったと反省する。

・保幼の先生方の考え方や保育のあり方が変わってきており、子ども達の遊びや学びが変化してきている様子も分かった。ドキュメンテーションについては、資料作りなど大変だと思うが、これをともに教員同士だけでなく、保護者との連携もでき、よい取組だと思う。

【市外保育所・幼稚園・認定こども園】

・生活科担当と5歳児担当とが、連携・交流の部会を共同の場として位置づけている市の取り組みはよいと感じる。H30年度からの保幼の接続カリキュラムや「10の姿」がつながる工夫と、H31年度からの小学校のスタートカリキュラム作成や実践に向けて我が町も模索中である。是非とも参考にさせていただきたい。

・今回の発表、助言の中で「公開に後悔ない効果あり」という言葉が胸に響いた。常に子どもの姿で評価するという姿勢を学んだ。保幼小中の先生と一緒に研修する機会を持つことはすばらしいと思った。



乳幼児教育フォーラム アンケート

小さい規模からでも始めてみたいと思った。

・市全体で公私問わず、保、幼が同じ方向性を持って、研修を進められていることが素晴らしい。子どもにとってとてもよいこと。保幼小の小学校区単位での交流は単なる活動の交流でなく、互恵性のあるもので、教員同士の学びとなっていて、自園の交流とは全く違うと感じた。

・ドキュメンテーション、環境構成の工夫、学ぶことがたくさんありすぎた。自園では、ドキュメンテーションを始めたばかりだが、まず、1歩、頑張りたい。保幼小連携、事例作成から始められた事に驚いた。小・中の先生も巻き込んで、子ども達の姿に目を向けることは素晴らしいと思った。「015カリキュラム」を作られる柔軟性も見習いたいと思う。

・公開保育後の研究会の持ち方(グループワーク)を工夫していきたい。保護者への発信の仕方について参考になった。環境の工夫がなされていて、子ども達が主体的に遊んでいる様子がよく分かった。園の環境構成を見直し、保育環境を工夫していきたいと思う。

【行政・大学関係者】

・接続カリキュラムが必要だと思いながらも、どうやって作ってあげればよいか、どういう場で(自治体、現場?)作っていくべきか、迷っているところ。舞鶴では連携活動をすべての地域で実践されていて、指導案作りなど、保幼小の話し合いの場があることがお互いを知ることになり、カリキュラムにも活かしていけると感じた。

・ドキュメンテーション研修の在り方や効果を知り、本市でも取り入れていけるとよいと感じた。また、自治体がすべきことを示していただいたことを、検討していきたいと思う。

・具体のある幼小連携、015カリキュラムについて大変参考になった。ドキュメンテーションのあり方や見方、活用の仕方について、理解を深めることもできた。

報告会では、実際に公開保育・授業をしていただいた園・校の先生方からの報告や公開後の変化や効果などについても具体的に伝えていただき、講師の先生方からの指導・助言を直接聞くことで、参加者の皆さんの理解がより深まったように感じます。

市外参加者の皆さんからは、市全体で乳幼児教育の質向上に取り組んでいることや、研修の方法(公開保育・グループワーク等)や効果を知ることができ、参考にしたい。といったご意見や、市全体で保幼小連携に取り組んでいる方法や保幼小接続カリキュラムについても評価をいただきました。